

20「久留里城」

私の住んでいる姉ヶ崎から鴨川道路を南に進み、袖ヶ浦市を抜け木更津市をかすめ、しばらく行くとJR久留里線と並行する国道410号線に入る。そしてしばらく行くと久留里に着く。

久留里は城下町である。町は古い建物が保存され城下町の風情が残る。

このあたりの水は、清澄山系から地下水脈を通って湧き出る名水である。この水を使った酒造りが昔から盛んで、「吉壽」の吉崎酒造などいくつかの酒蔵がある。

また、この地方で発達した「上総掘り」による自噴井戸が町内あちこちにあり、平成の名水百選にも選ばれた「久留里の水」を自由に持ち帰ることができる。

丘の上にある久留里城には、自転車で2度ほど往復したことがある。

家から往復52キロで、休日サイクリングには程よい距離だ。往きは一般的に上りで大変だが、帰りは下りで楽しい走りになる。

『久留里城は戦国時代後期、房総の覇者里見氏6代の義堯（よしたか）が本拠とし、越後の上杉謙信らと同盟を結び小田原の北条氏と対立する。

徳川の世になり重要拠点となった久留里城には、大須賀、土屋、黒田の各大名が入城し近世城郭として整備され明治を迎えた。久留里城は築城に際し、3日に一度雨が降ったという伝説から「雨城」の別名がある。』（久留里城址資料館パンフより）

最近久留里城に関係ある興味深いことを知った。

久留里城は、江戸時代に土屋家が藩主となり2万石を与えられ居城とした。土屋氏は甲斐武田氏に仕えた武将の流れを汲む家系である。

ところが、3代目が藩主の器でなかったことから、改易され城を明け渡すことになってしまう。

3千石の旗本に格下げになり、本所松坂町に屋敷を与えられ4代目土屋主税（ちから）が家督を継いだ。この土屋の屋敷の隣に、あの吉良上野介が移って来るのである。

浅野内匠頭刃傷事件のあと、赤穂浪士が吉良屋敷に討入るといふ噂があり、周囲の大名から苦情が出たため鍛冶橋の屋敷から移らざるを得なくなった。一時、子の上杉弾正大弼（だんじょうのたいひつ）の屋敷に身を寄せたあと、土屋主税屋敷の隣に移る。

この場所は、江戸城近くの前屋敷から比べれば、浪士の討入りは格段に容易な場所であった。

赤穂浪士仇討の時、隣の土屋主税に『浅野内匠頭家来、主人の敵である吉良上野介殿御宅へ只今押し込みました。騒動が及ぶかもしれませんが、武士は相い互の義ですので、お構いしませんように』と申し入れた。

それを聞いた土屋主税は、吉良には加担しないことを約束。さらに堀に沿って提灯を掲げ吉良邸を照らしその下に射手を配し、もし堀などのり越えてくる者があれば誰であろうとも射ち落とせと命じている。

このことは土屋主税本人から新井白石が聞き取ったもので、書物にも記されている。

ここで新井白石が出てくるのは、白石が久留里城にゆかりの人だからである。

彼の父は久留里藩に仕えた人で、白石は18から21歳までそこで過ごし、初代藩主から非凡な才能を認められた。その後、37歳のとき甲府藩へ仕官してから白石の運命が変わる。

甲府藩は徳川家の親藩で、藩主徳川綱豊は本筋ではなかったが、紆余曲折幸運にも将軍となる。6代将軍「家宣」である。

家宣は甲府藩時代からの家臣であった間部詮房（まなべあきふさ）と白石を側近として登用し、職責の大半を代行させた。

白石は、5代目綱吉の発した「生類憐れみの令」などで乱れた世にあって、後に「正徳の治」と呼ばれる政治改革を行った。このあたりのことは小説「市塵」に詳しい。

一介の旗本が、将軍側近として幕政にこれほど深く関与したのは、この白石をおいて他にない。

久留里城にゆかりの人が、このように歴史の表舞台で活躍したことを知りちょっとした驚きであった。

(2 0 1 1 . 0 6 . 2 6)